

10.2 [金]	第4回 東京オペラシティ名曲シリーズ 東京オペラシティ コンサートホール／19時開演 The 4th Tokyo Opera City Popular Series Friday, 2nd October, 19:00 / Tokyo Opera City Concert Hall
10.3 [土]	第83回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 The 83rd Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series Saturday, 3rd October, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／下野竜也 (首席客演指揮者) Principal Guest Conductor TATSUYA SHIMONO P.4

オーボエ／セリーヌ・モワネ Oboe CÉLINE MOINET P.5

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

モーツァルト オーボエ協奏曲 ハ長調 K.314 [約21分] P.6

MOZART / Oboe Concerto in C major, K. 314

- I. Allegro aperto
- II. Adagio non troppo
- III. Allegretto

[休憩 Intermission]

マーラー 交響曲 第1番 ニ長調 〈巨人〉 [約53分] P.7

MAHLER / Symphony No. 1 in D major “Titan”

- I. Langsam. Schleppend. – Immer sehr gemächlich
- II. Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell
- III. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
- IV. Stürmisch bewegt

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業) (10/3)

[協力] 横浜みなとみらいホール (10/3)

10.13 [火]	第552回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 The 552nd Subscription Concert Tuesday, 13th October, 19:00 / Suntory Hall
-----------	--

指揮／下野竜也 (首席客演指揮者) Principal Guest Conductor TATSUYA SHIMONO P.4

ヴィオラ／鈴木康浩 (読響ソロ・ヴィオラ)
Viola YASUHIRO SUZUKI (YNSO Solo Viola) P.5

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ベートーヴェン 序曲〈コリオラン〉 作品62 [約8分] P.9
BEETHOVEN / “Coriolan” Overture Op.62

ヒンデミット 白鳥を焼く男 (ヴィオラと管弦楽) [約25分] P.10
HINDEMITH / Der Schwanendreher for viola and orchestra

- I. 山と深い谷の間で
- II. 小さな菩提樹よ、その葉を揺るがせよ
- III. あなたは白鳥を焼く男ではありませんね

[休憩 Intermission]

ジョン・アダムズ ハルモニーレーレ (和声学) [約40分] P.11

JOHN ADAMS / Harmonielehre

- I. —
- II. アンフォルタスの傷
- III. マイスター・エックハルトとクエッキー

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業)

[協力] アフラック (アメリカンファミリー生命保険会社)

※平成27年度 (第70回) 文化庁芸術祭参加公演

下野 竜也

(首席客演指揮者)
Tatsuya Shimono

アダムズの代表作と
マーラーの〈巨人〉
二つの大作に挑む

2006年11月から13年3月まで読響の初代正指揮者を務め、現在は首席客演指揮者。古典から現代までの幅広いレパートリーと独自のプログラミングで話題を呼んでいる。今月はアメリカ作曲界の大御所、アダムズの〈ハルモ

ニーレーレ (和声学)〉とマーラーの〈巨人〉、二つの大作で存分に腕を振るう。

1969年鹿児島生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室、イタリア・シエナのキジアーナ音楽院で学んだ後、大阪フィルの指揮研究員となり朝比奈隆氏ら巨匠たちの薫陶を受けた。文化庁派遣芸術家在外研修員としてウィーン国立演劇音楽大学に留学中、2000年の東京国際音楽コンクールと01年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝を飾った。

国内の主要オーケストラはもとより、チエコ・フィル、シュトゥットガルト放送響、



©読響

ローマ・サンタチェチーリア管などと共演し、国際的に活躍するほか、上野学園大学教授として後進の指導に当たっている。また、出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門奨励賞など受賞も数多い。14年9月には読響とカレル・フサの〈この地球を神と崇める〉(管弦楽版)を日本初演し、読響をミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞に導いた。

- ◇10月2日 東京オペラシティ名曲シリーズ
- ◇10月3日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
- ◇10月13日 定期演奏会



©François Sechet

オーボエ セリーヌ・モワネ

Oboe Céline Moinet

フランス・リール生まれ。パリ国立高等音楽院でモーリス・ブルグに学び、グスタフ・マーラー・ユース・オーケストラに在籍後、ベルリン・ドイツ響、北ドイツ放送響、シュトゥットガルト放送響などに招かれた。2006年から08年までマンハイム国立歌劇場管、08年からドレスデン国立歌劇場管でソロ奏者を務める。ソリストとしてネルソンス指揮のドレスデン国立歌劇場管、ルイジ指揮のPMFオーケストラなどとモーツァルトやマルタンの協奏曲を共演。CDではフランス・ハルモニウムンディから無伴奏作品集、ハープとのデュオが出ている。

- ◇10月2日 東京オペラシティ名曲シリーズ
- ◇10月3日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©読響

ヴィオラ 鈴木康浩

(読響ソロ・ヴィオラ)
Viola Yasuhiro Suzuki (YNSO Solo Viola)

読響の誇るソロ・ヴィオラ奏者が、ヒンデミットの名作に挑戦する。1976年新潟県出身。桐朋学園大学を卒業後、ヴィオラに転向。2001年からベルリンのカラヤン・アカデミーで研鑽を積み、その後ベルリン・フィルの契約団員として活躍。06年10月、読響に迎えられた。第7回全日本学生音楽コンクール東京大会ヴァイオリン高校の部第1位、第9回クラシックコンクール全国大会ヴィオラ部門最高位、第12回宝塚ベガ音楽コンクール弦楽部門第1位。ヴァイオリンを辰巳明子、ヴィオラを岡田伸夫の各氏に師事。

- ◇10月13日 定期演奏会

10.2 [金]

10.3 [土]

有田 栄 (ありた さかえ)・音楽学、昭和音楽大学教授

モーツァルト オーボエ協奏曲 ハ長調 K.314

作曲：1777年頃／初演：不明／演奏時間：約21分

生き生きと語られる音楽

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756～91) は、とりわけ誰といった師を持たないかわりに、各地を旅して出会った人々との触れ合いの中から多くを学んでいった人だった。そんな彼にとって、優れた音楽家との出会いの場である「協奏曲」は、一生を通じて最も強い関心を抱いていた器楽のジャンルだった。

ニ長調のフルート協奏曲の原曲でもあるこの曲は、もともとはザルツブルク宮廷礼拝堂のオーボエ奏者、G・フェルレンディスのために書かれたものだと考えられている。1777年秋、21歳のモーツァルトは、この曲の楽譜を携えてマンハイムとパリを巡る旅に出立する。彼はマンハイムの宮廷で、新しい音楽様式に触れただけでなく、当代きっての音楽家たちと交流し、夢

のように楽しい日々を過ごしたのだった。

モーツァルトが父に宛てた手紙には、宮廷楽団を束ねるC・カンナビヒの屋敷で開かれた演奏会の話が出てくる。彼は「綺麗で繊細な音を奏でるラムさん」ことF・ラムと出会い、この協奏曲を彼にプレゼントした。ラムは小躍りせんばかりに喜び、これをモーツァルトの滞在中何度も演奏して人々の喝采を浴びたという。コンサートでは、ラムのほか、モーツァルトのお気に入りの弟子であるカンナビヒの娘がピアノ協奏曲を、彼が夢中で恋したA・ウェーバーが〈ルーチョ・シッラ〉のアリアを演奏し、モーツァルト自身も即興演奏をして盛り上げた。親しい人々に囲まれて、生き生きと音楽を語り、奏でるモーツァルトの姿が目浮かぶようだ。

楽器編成／オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏オーボエ

マーラー 交響曲 第1番 ニ長調 〈巨人〉

作曲：1884?～88年、1893～96年改訂、1906年頃再改訂／初演：1889年11月20日ブダペスト／演奏時間：約53分

破綻あり逸脱ありの人生を凝縮

ドイツの文豪トーマス・マンが、みずからの体験をもとに書いた小説『ヴェニスに死す』(1912)。主人公のモデルが、グスタフ・マーラー (1860～1911) であることはよく知られている。1970年代には、この小説を原作とするルキノ・ヴィスコンティの名画《ヴェニスに死す》(1971)、さらにヴィスコンティへのオマージュを含んだケン・ラッセルの映画《マーラー》(1974) が世にあらわれ、「マーラー・ブーム」を盛り上げた。これらの作品に共通するのは、一人の男を運命的な瞬間へと運ぶ「旅」のモチーフだ。そして実際マーラーは、この世に、同時代に、居場所を持たぬ「漂泊の人」だった。

「私には、三重の意味で故郷がない。チェコではボヘミア人として、ドイツではオーストリア人として、そして世界の中ではユダヤ人として……」。この言葉が物語るように、マーラーの人生は、常に拭い難い疎外感と欠落感に蝕まれていた。ボヘミアで過ごした幼少期、両親は絶えず静いを繰り返していた。いたたまれずに彼が耳を塞いで家の外に逃げ出すと、なぜかそんな折に限って、大道芸人の手回しオルガンや、陽気な村祭りの音楽、森の小鳥たちの囀りが聞こえてきた。この原体験から、自

分の人生には、深刻さと軽薄さ、悲劇と滑稽とが分かち難いものとして刷り込まれたのだ、とマーラーは言う。19世紀ロマン主義の時代、人々が芸術に気高さや、崇高さや、偉大さを求めたこの時代において、作曲家マーラーが、神々しい「英雄の生涯」ではなく、喜びと悲しみが混在し、矛盾と葛藤に満ちた、「我らの人生のドラマ」を描こうとした原点がそこにある。

他方でマーラーは、19世紀末～20世紀初頭の時代を代表する指揮者でもあった。ウィーンの音楽院時代から培った確かな技術と、ウィーン大学で学んだ豊かな教養を背景に、情熱的な指揮ぶり、作品に対する斬新な解釈が彼のトレードマークだった。若い時からカッセル、プラハ、ライプツィヒ、ブダペスト、ハンブルクなど、^{そうそう} 錚々たる歌劇場の指揮者を務め、後にはウィーンの宮廷歌劇場や、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で、文字通り時代を画す業績を残している。しかし、排他的な民族主義が高まる当時のヨーロッパでは、ユダヤ系に対する反感は根深く、いずれの劇場もけっして彼を温かく迎えたとは言えなかった。完璧主義で妥協を知らない彼の態度も、劇場関係者や楽団員

10.13 [火]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

ベートーヴェン
序曲〈コリオラン〉 作品62

作曲：1807年／初演：1807年3月、ウィーン／演奏時間：約8分

ローマ神話の悲劇を題材に

ウィーンの宮廷秘書官で劇作家でもあったハインリヒ・コリン（1772～1811）は、1802年にローマ神話の英雄コリオラヌスを題材にした悲劇『コリオラン』を書いた。コリオラヌスは、ローマ共和制に対する意見の相違から国外に追放され、数年後、隣国の将軍となってローマに攻め入るが、母と妻に諫められて進退に窮し、最後はみずから命を絶ってしまう悲劇の英雄である。この舞台劇が、同年11月24日に宮廷ホーフブルク劇場で初演されると大成功を収め、その後1805年まで毎年たびたび上演される作品となった。

コリンの友人のルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が、この上演を観たかどうかは明らかではない。ただ、この舞台劇に音楽が付いていないことを知り、序曲を書くこと

を思い立ったようで、1807年の年が明けるとすぐに作曲に取りかかった。作品は、コリンに献呈されたが、ベートーヴェンの序曲を付けて舞台が上演された記録は残されていない。

ベートーヴェンは、前年のオペラの失敗で失った自信と名誉を回復するために演奏会を開いた。序曲〈コリオラン〉も、1807年3月にロプコヴィッツ侯の邸宅で行われた2回の演奏会のいずれかで、新作の交響曲第4番やピアノ協奏曲第4番とともに初演された。

序曲（アレグロ・コン・ブリオ）は、同時期に作曲していた交響曲第5番と同じハ短調で書かれている。弦楽器の長い主音と全楽器による和音を組み合わせた決然とした序奏に続いて、重苦しい第1主題と、優しく明るい変ホ長調の第2主題が提示される。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

の反発を買った。こうして現実の世界においてもまた、マーラーは、常に身の置き所なくさすらう「遍歴の旅人」であったのだ。

交響曲第1番は、そんなマーラーの漂える人生を映したかのような作品だ。〈巨人〉というタイトルから、神話的なイメージや、あるいはツァラトゥストラのような「超人」を想像するのは間違っている。標題の由来は、ドイツの作家ジャン・パウルの大著『巨人』（1802）。ヴォルテールの『カンディード』や、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』などと同じように、この物語の主人公アルバーノもまた、人生の旅の途上、さまざまな経験を経て成長し、自己を形成していく。破綻あり、逸脱あり。だが人生とはそういうものだ。

マーラーは、小説の世界と、さらに自身がかほぼ同時期に作曲・改稿していた歌曲集〈さすらう若人の歌〉の世界とを、この交響曲の中に凝縮させた。この曲は当初五つの楽章を持つ「交響詩」として構想され、各楽章には、内容を暗示する標題が付けられていた。しかしマーラーは後にこれを4楽章の「交響曲」とし、同時に各楽章の標題と〈巨人〉のタイトルも削除した。こうして音楽を説明する言葉は消えたが、むしろ音が暗示する世界はより深く、豊かになったといえるかもしれない。小説、歌曲、交響曲の世界、そしてマーラー自身の人生が、まるで合わせ鏡のように互いを映し出し、そこ

に希望と絶望、光と闇、真摯^{しんし}さと滑稽さ、生きることへの執着と悲痛な諦めとが交錯する。実際マーラーは当初、前半の部分に「若き日々から、花と果実と棘について」という言葉を添え、後半部分には「人間の喜劇」という標題を与えて、この交響曲（交響詩）が「人生」の寓意であることを暗示していた。

第1楽章は、「春、そして限りなく。序奏は長き冬の眠りから目覚める自然（朝まだきに目覚める自然）を描く」と題されていた。序奏ののち、カッコウの声のこだまの中から、〈さすらう若人の歌〉第2曲「朝の野辺を歩けば」の旋律が聴えてくる。この後、もとは「花の章」と呼ばれる楽章があったが、交響曲では削除されている。つづいて「順風満帆」と題されていた第2楽章は、躍動的な楽想と、甘く夢見がちな楽想とが交代する舞曲風楽章。かつて「座礁！カロ風の葬送行進曲（狩人の葬送）」と題された第3楽章では、有名な俗謡がパロディとなって聴えてくる。鋭い筆致で巷^{ちまた}の生と死を描いた17世紀の版画家カロの戯画さながら、滑稽な動物たちの葬列が続く。その向こうから響く〈若人〉第4曲“彼女の青い目が”の旋律が、失われた恋を嘆く。そしてかつて「地獄から、深く傷ついた心の絶望が突如噴出（地獄から天国へ）」と題された第4楽章。激しく上下する旋律や、息を呑む休符が表現する激しい感情の渦巻きと、熱にうかされたような美しい憧れ、金管の咆^{ほう}哮^{こう}が暗示する戦いと勝利の輝きが交錯する。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット4（バスクラリネット、エスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼）、ハープ、弦五部

ヒンデミット 白鳥を焼く男 (ヴィオラと管弦楽)

作曲：1935年／初演：1935年11月14日、アムステルダム／演奏時間：約25分

民謡由来の旋律を表情豊かに

20世紀前半のドイツの作曲家パウル・ヒンデミット（1895～1963）は、最終的には14種類の楽器をマスターしたと言われるほど、演奏家としても多才な能力を発揮した。そのなかで彼が最も愛した楽器はヴィオラで、1920年代は高名なアマール弦楽四重奏団の一員として活躍し、ソリストとしても欧米で活発に演奏活動を行った。

ナチス政権樹立後、ヒンデミットはユダヤ人ではなかったものの、彼を取り巻く環境は次第に厳しくなり、オペラ〈画家マティス〉（1934）がナチスの圧力を受けて上演中止になるなど、ドイツでの活動が困難になってきた。ヒンデミットにとって3作目のヴィオラ協奏曲となる〈白鳥を焼く男〉は、その翌年、1935年に作曲された。

この作品では、四つのドイツの古い民謡が素材として用いられ、〈白鳥を焼く男〉という物騒なタイトルも、民謡に由来する。ヴィオラ独奏が導き手となり、数々の難技巧を披露する。オーケストラの楽器編成からヴァイオリ

ンとヴィオラを外し、木管楽器中心の柔らかな響きからヴィオラ独奏の音色が浮かび上がるように設計された。

第1楽章 “山と深い谷の間で” ヴィオラ独奏で始まる、ゆったりとした序奏に続いて、主部では三つの主題が現れる。弾むような軽快なリズムにのって進められ、最後にヴィオラ独奏が再現されて力強く結ばれる。

第2楽章 “小さな菩提樹よ、その葉を揺るがせよ” ^{ほだいじゅ} ハープとヴィオラが静かに美しい旋律を歌い出す。管楽器との対話を経て、ファゴットで示された民謡「カッコウが屋根の上にとまっていた」に基づく軽快なフガート主題が、各楽器に現れ、そこにヴィオラも加わる。最後に冒頭の静かな音楽が、ホルンを加えて戻ってくる。

第3楽章 変奏曲 “あなたは白鳥を焼く男ではありませんね” 民謡に基づく変奏曲。活発なオーケストラの音楽に続いて、ヴィオラが陽気な旋律を歌う。音楽はさまざまに表情を変えるが、ヴィオラの技巧が終始華やかに際立つ。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、ハープ、チェロ、コントラバス、独奏ヴィオラ

ジョン・アダムズ ハルモニーレーレ (和声学)

作曲：1984～85年／初演：1985年3月21日、サンフランシスコ／演奏時間：約40分

独特の浮遊感で描く心理的調和

現代アメリカを代表する作曲家のひとり、ジョン・アダムズ（1947～）は、ハーバード大学でキルシュナーらに師事してアカデミックな作曲技法を学び、卒業後、活動拠点を西海岸のサンフランシスコに移した。同地の音楽院で教職に就くとともに、創作活動を続け、1970年代後半からポスト・ミニマル（ライヒやグラスが開拓した音型反復を基本とするミニマル音楽の新世代）の作曲家として注目を浴びた。初期の作品こそライヒらの影響もみられるが、その発想を飛躍させ、反復を組織的に展開させる手法にたどりついた。1982～85年サンフランシスコ交響楽団のレジデンス作曲家を務め、その間に、〈ハーモニウム〉（1980）、〈グランド・ピアノラ・ミュージック〉（1982）、〈ハルモニーレーレ〉を完成させ、作曲家としての地位を確立した。

アダムズは、その後も幅広いジャンルで数多くの作品を手がけている。なかでも演出家ピーター・セラーズと組んで発表したオペラ〈中国のニクソン〉（1987）、〈クリングホファーの死〉（1991）、〈ドクター・アトミック〉（2005）

などセンセーショナルな話題を提供してきた。

〈ハルモニーレーレ〉は、ピアノやチェレスタを含む大編成の管弦楽曲で、1985年にエド・デ・ワールト指揮のサンフランシスコ交響楽団によって初演された。タイトルは、20世紀前半の大作曲家、アルノルト・シェーンベルク（1874～1951）の『ハルモニーレーレ（和声学）』（1911年出版）に由来する。これは、シェーンベルクが調性を放棄して、無調で音楽を書き始めた時期の著作で、そこでは独自の和声分析と理論が展開されている。アダムズはシェーンベルクを彼の弟子のキルシュナーを通して知り、「12音音楽の響きは好きではない」が、芸術家としての揺るぎない姿勢に刺激を受けた。もっとも広い意味で、タイトルは、「精神的または心理的な調和（ハーモニー）を指している」とも語っている。

アダムズのこの作品は、ミニマルが生み出す独特の浮遊感と、色彩豊かなオーケストラのロマン的な響きが結びついたところに魅力がある。そこには直接の引用はないが、世紀転換期のマ

ーラー、シベリウス、ドビュッシーら、後期ロマン派の響きも含まれるため、現代音楽とはいえ親しみやすさもある。初演以降、欧米ではしばしば取り上げられているが、日本では1986年の初演以降、演奏の機会に恵まれず、本日が約30年ぶりの、待望の再演となる。

全体は、三つの楽章から構成されている。以下、各楽章について作曲者の言葉を借りながら解説していこう。

第1楽章 この楽章にはタイトルが付されていないが、アダムズは、冒頭部分を自身の夢に出てきた情景と重ね合わせた。「サンフランシスコ湾から巨大な石油タンカーが宇宙船のように空中に浮かび上がり、その錆びついた船体が太陽の光で輝いていた」。冒頭はホ音とト音（ミとソ）の短3度音程の2音が全楽器で激しく打ちつけられ、その持続は次第に長くなり、再び短くなる。その後、さまざまな響きが増殖していき、しばらくすると持続的な響きを背景に、チェロから始まる弦楽器の息の長い美しい旋律が静かに歌われる部分となる。再び激しい音楽が戻ってきて、冒頭部分が再現されて結ばれる。

第2楽章 “アンフォルタスの傷” ワーグナーの楽劇〈パルジファル〉にも登場する中世の聖杯王アンフォルタス。

その傷というのは、アダムズによれば「再生や生産を阻害する傷、すなわち人間の創造力の傷」で、「不吉なしるし」でもある。音楽は、ティンパニの持続のもと、低弦楽器からゆるやかに立ち上がる。「不能と精神の病を描いた音楽」とも述べているが、小さな揺れ動きで進められ、トランペット独奏のト音を基にした旋律が静かに響く。やがてハープやチェレスタから始まって上昇を続けるが、その4度音程を含む音型は、シェーンベルクが調性を離れ、無調へと近づいたときの手法を思わせる。ティンパニの激しい持続から始まるクライマックスは、「マーラーの最後の未完の交響曲へのオマージュ」とも言われる。最後はイ音（ラ）の反復に落ち着く。

第3楽章 “マイスター・エックハルトとクエッキー” タイトルは、中世の偉大な神学者とその娘エミリーのニックネームに由来する。前楽章と対をなす楽章と位置づけられ、開始の穏やかできめ細かな織物のような音楽は、「乳児がエックハルトの肩に乗り、^{おんちよう}元で恩寵の秘密をささやく」というイメージから作られた。軽やかに揺れ動く神秘的な音楽は、次第に力強さを増し、さまざまな調性を経て、最後は変ホ長調の輝かしい響きのなかで終わる。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット4（バスクラリネット持替）、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ、打楽器（マリンバ、ヴィブラフォン、シロフォン、チューブラーベル、クロティル、グロッケンシュピール、サスペンデッド・シンバル、シズル・シンバル、スモール・クラッシュ・シンバル、ベルツリー、銅鑼、トライアングル、太太鼓）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部